

名句が滑稽句に変身 ②

小林英昭

名句を滑稽句に変身させる時、どうしても独りよがりになることは否めない。また俳句としての体裁を保つのが難しく、ましてや季語の斡旋となると苦慮する。

名句 しぐるるや駅に西口東口 安住 敦

しぐるるや駅にがま口^す 掘る手口

西口東口のリフレインに似たリズム感をいかに生かすかが勝負。そこを押さえれば、変身に成功である。季語は変えずにそのままいただいた。

名句 自然薯を暴れぬやうに 藁^{つと} 苞のなか 杉本雷造

自然薯が折れぬやうにとするギブス

折れたら自然薯の価値はぐーんと下がる。だから掘るときは神経を集中し、添え木をして運ぶ。テレビで朝鮮人参を掘っていたが、これも同じである。

名句 約束の寒の土筆を煮てください 川端茅舎

約束の缶の真鯖を煮てください

この句の眼目は、「寒の土筆」と「缶の真鯖」が違うだけで句の内容が変わっていくところだろう。滑稽句に変身させる基本的なテクニックである。以下は、そのパターンがよく出てくるものである。

名句 椿落つ樹下に余白のまだありて 神蔵 器

椿落つ樹下は満員札止に

落ちた椿は不思議と上を向いて落ちている。それぞれが離れている場合もあれば、まるで地面に咲いている様に、びっしりと落ちている場合もある。名句では前者を、滑稽句では後者を詠んだ。

名句 ばか、はしら、かき、はまぐりや春の雪 久保田万太郎

つばす、はまち、めじろ、ぶりなら出世魚

名句は貝の名前の列記である。単純なようだがリズム感がある。そのあたりが

この句のねらい。春の雪が絶妙な季語の斡旋になっている。一方、滑稽句の方は、リズムから言えば、「ぶり、めじろ、はまち、つばす」としたいのだが、それでは出世順と違う。

名句 水洩や鼻の先だけ暮れ残る 芥川龍之介

水洩や袖の先だけぺかぺかに

戦後は鼻たれ小僧が多かった。多分栄養状態が悪かったせいだろう。たいいていの子は袖の先で鼻をぬぐっていた。それが乾くとぺかぺかに光る。みんな貧しかったころの良き？時代のことを思い出す。

名句 貝の名に鳥やさくらや光悦忌 上田五千石

具の名には大根竹輪麩おでん種

「貝」と「具」は、視覚的には同じような字に見える。どこが滑稽句？と問われるといささか返答に窮すが、鍋の中で食われるのを待っている姿は、滑稽と見えなくもない。

名句 雪兎きぬずれを世にのこしたる 宇佐美魚目

雪兎南天の目をのこしたる

お盆に乗った雪兎。温かき部屋で一夜明ければ残るのは水滴と目玉に使った南天の実。南天の葉が耳だったことも言いたいが、十七音に収まらない。

名句 あたらしき下駄のうれしき地蔵盆 岸風三樓

あたらしき下駄もすりへる郡上踊

夜を徹して踊る郡上踊り。新しい下ろしたての下駄も、夜を徹して踊れば、朝には擦り減ってくる。

名句 天上の恋をうらやみ星祭 高橋淡路女

天上の星に恋するホームレス

名句 蟻地獄松風をきくばかりなり 高野素十

蟻地獄開店休業ばかりなり

*前号の「遠山に灯の当たりたる枯野かな」の「灯」は「日」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。
